

言いたい ほぐたい

復と引き換えても、「芹沢光治良戦中戦後日記」によると、イリアム・マードックの「シヨパン評伝」を面白く読む」「シヨパンはなかなか面白いが大仰だ」「世界大戦の戦況が悪化した1944年2月、「『若きモーツァルト』を読む。3度と見られない50頁一気に読了。天才の生育について考える」と書いています。今回、「光治良が好んだ音楽を聴く会」を催した。計画を上回る人数のご参加をいただき、厚くお礼申し上げます。

沼津市が生んだ作家、芹沢光治良の誕生日(5月4日)、『芹沢作品の朗読と光治良が好んだ音楽を聴く会』を催した。計画を上回る人数のご参加をいただき、厚くお礼申し上げます。

光治良の作品には詩的な情趣あふれる描写がたくさんある。例えば、今回の「朗読」で取り上げた『巴里に死す』の終章の直前。主人公の伸子(しんこ)は、完治しない結核の身をおして、スイスの療養所から、幼い娘を預けてあるパリに向かう。病からの快

「超越した力」との対話が雄大な自然を背景に描かれる。朗読によって、詩のよさに簡潔な言葉が、いっそう印象強く、光治良は、詩情を讀者に伝えるのに、音楽の表現力もまた自分の中で培ってきたように思われる。光治良が遺した

た、5月には「ウレた優しい姿」を記憶しておられる。ベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」は、小説『巴里に死す』に登場する。ドビュッシーの「亜麻色の髪の乙女」は、戦後、光治良が再訪したパリで、ピアノニストとして留学中の四女玲子氏と共に、招待されたフランス人家庭で聴いたピアノ曲。今回、いずれも生演奏で聴いて頂いた。

光治良を偲ぶ会

不破 久温

随筆に登場した曲、光治良と交流のあった方の記憶をもとに選んだ。シューベルトの歌曲「アヴェ・マリア」「菩提樹」は、光治良の三女の文子氏が、戦時中「心も荒涼としていた私達に、(軽井沢の疎開先で)美しい歌って励ましてく

「超越した力」との対話が雄大な自然を背景に描かれる。朗読によって、詩のよさに簡潔な言葉が、いっそう印象強く、光治良は、詩情を讀者に伝えるのに、音楽の表現力もまた自分の中で培ってきたように思われる。光治良が遺した

(沼津芹沢光治良文学愛好会、上石田)